考察、第二に職業、第三に社會階級の死亡率に及ぼす影響を觀察する。第一は純醫學的で、第二、第三の職業的社會階級別死亡率の研究は我國に全然資料を缺くを以つて資料は悉く英國の夫で、英國の職業別死亡率研究の紹介である。

以上は只結構と片鱗の紹介で、詳細の紹介は亦別に他の人に願ふの外ない。唯一言私の著者に對する希望を云ふならば、之丈詳細に死亡率の研究を遂げた著者は、我國の死亡統計の一大缺陷たる職業別死因統計を改善する爲に一時の勞をとるべきではあるまいか。私は何時でも喜んで博士の驟尾に附して犬馬の勞に服する事を辭するものではない。（北岡壽逸）

カイザー著「獨逸人口史」

Erich Keyser, Bevölkerungsgeschichte Deutschlands, 1938

人口論史に關する論策は尠くないが、人口史となるとまとまつたものは殆んどないといつてよい。本册子は特に獨逸古代民族史に造詣の深い著者が今後の更に具體的な研究考證への手引きとする爲に今日までの諸家の研究成果に一應の概觀的集成を試みたもので、獨逸人口史として現在我々の利用し得る最新の好著であるといへよう。著者の最後の目的は國民社會主義の主旨に隨つて獨逸民族の本質を究明することで、獨逸人口史は言はゞ其の豫備的研究として缺く可からざる前提をなすものであるといふ。蓋し「民族」とは「人種」と同義ではなく、また「國民」なる概念とも必ずしも相蔽ふものではない。また民族を文化共同體或は言語共同體などゝ定義することも理由がないではないが、併し一民族の創造する固有の文化は同時に他民族へも移植されるものであるし、また獨逸語を話す獨逸系ニダヤ人は決して獨逸人ではない。著者によれば民族とは幾世代にも亙る血族的な連繫と共同の生活とを通じて形成され、自ら他民族と區別するやうになつた史的成果としての生活共同體を謂ふわけで、かゝる史的成果としての民族の本質を明らかにする爲にこそ獨逸民族成立の史的葛藤は先づ之を特に獨逸人口史として展開せねばならぬといふ。從つて著者のいふ獨逸人口史とは筆を獨逸民族の先史時代に遡る人種的淵源から說き起し、其後の民族移動、他民族との鬪爭、或は身分階級的分化と其の變遷等諸般の史的場面に亙つて論述されてをり、この多難な史的錯綜を一貫して獨逸民族が古代以來自らの血と土地とを喪ふことなく持續して來た逞しい民族的生活力を闡明することを主眼としてをり、從つてまた近代特に十九世紀文明が生んだ血の意識の喪失、出產力の減退、或は都市集中の弊害等寒心すべき諸事象を警告し乍ら之に對するナチス人口政策の將來に期待して筆を結んでゐる。統計的數字も信憑し得るものの殆んど凡てを各地方各都市等について列擧するといふ細微を盡したものだが、概括的な結論を示してゐないのは著者の學者的良心によるものといへようか。たゞ獨逸人口史の大勢を窺ふとする我々他國の讀者にとつては多少煩に堪へ難いものがないでもない。所謂人口政策的史實について關說するところの殆んどないのも物足りない點の一つだが、著者の目的はかゝる人爲を超えたるものを闡明するところにあるのかも知れない。

著作の性質上內容の全般的紹介は不可能だが、以下筆者興味本位の讀後の心覺えを摘記して好著紹介の辭に替へることゝする。

一、獨逸の土地はインドゲルマン民族の故鄉である

著者によると獨逸人口史は地上に於ける最初の人類の出現と共に初まる。といふのは遠く氷河時代以前或はその中間の溫暖期に生存してゐたと推定される前人類の遺跡が獨逸の土地に見出されたからで、所謂 Prae-homo Heidelbergensis として知られる右の事實は人類發生の一元說を現學界の定說なりとする著者にとつては同時に人類史上獨逸の土地の特別

の榮譽を證據立てるものであるらしい。が文化遺跡の皆無な前人類についてはさて置き、現存人類の祖先が氷河時代氷河の北方後退に伴ひ中部及び上部獨逸地方に住んでゐたことは確かで、氷河の一層の後退は更に北海沿岸地方までもその棲息地となつたと考へられる。その遺跡はデュッセルドルフ近くのネアンデルタールに最初に發見されてネアンデルタール人と呼ばれてゐるものであるが、歐洲最初の人類の學名が獨逸の地名を以て呼ばれてゐることにも著者は多大の誇りを示してゐるのは兎も角稚氣があつて面白い。現在の歐洲人の成立に明白な影響をもつ人種の出現は氷河時代の終末期で、氷河の消えて後明るい森に蔽はれて豐饒な沃土を形成した北獨逸地方や南スウェーデン地方に出現した所謂北方人種 die nordische Rasse が先づ獨逸人の一番舊い人種上の先祖とみてよい。

人類史上特記すべき事件は新石器時代に於ける農耕民族の出現で、その定住生活は人口增殖の仕方をも一變し家族といふものを中心として一種の淘汰作用が行はれるに到つたばかりでなく、又この定住生活は以前の遊牧生活に較べると却つて他人種の血を受け入れる可能性を增大したと考へられる。そのやうな人種的混血の後に各個の人口群ははじめて種々の人種的偏倚をもつた種々の民族として形成されたといへよう。所謂インド・ゲルマン民族とは北方人種の血を根幹として生まれ、白い皮膚、ブロンドの髮、青い眼、伸びた背丈、長い頭蓋等を特徵とするもので、著者によれば此のインド・ゲルマン民族はユトレヒト半島及び北獨逸地方に現れ此處からウラル、黑海、カスピ海へ、更には印度までも妻子や車馬を伴つた農民移動の形で長期に亙り擴がつて行つたことになつてをり、著者は此の大移動を後のゲルマン民族大移動や或は近世の西葡英佛人の世界植民に匹敵するものだとしてゐる。この種の移住が新移住地の舊人口と重なり合つて其處に新しい民族の發生を見ることは當然で、インド・ゲルマン民族は歐洲では北のゲルマン die Germanen 南のケルト die Kelten 東のイリリエン die Illyrier の三民族に分化したと考へられる。

二、古代ゲルマン民族は獨逸の土地を完全にゲルマン化した

獨逸古代史はゲルマン民族が蕃殖膨脹の結果他の二民族を同化して現在の獨逸の土地を完全にゲルマン化した歷史といつてよく、今でも南獨逸にケルトの混血が認められるのも其の名殘りといへよう。はじめ紀元前一五〇〇——一二〇〇年頃ユトレヒト半島及南スカンヂナビア地方に棲存したと考へられるゲルマン民族は次第に南へ西へ東へと膨脹して西曆紀元の直前にはマース河からライン上流、東はボヘミアからカルパートまで擴がるに到つた。この膨脹が自然とゲンマン民族に種族的な分化を結果したのは當然で、スカンヂナビアやデンマーク地方に殘つた北ゲルマンは獨逸人口史にとつてはさして重要ではない。以後の獨逸民族の形成にとつて決定的なのは南ゲルマンで、之は更に東ゲルマンと西ゲルマンに分かれるが、その內東ゲルマンは種々の種族の交替こそあれ大約紀元前八〇〇年から紀元後五〇〇年に到る間東方に定住して後にゲルマン民族大移動として史上に著名な大運動をしたヴァンダル、ブルグンド、ゴート、マルコマンネン、ランゴバルド等の諸族であるが、その大移動後のウィスツラ河畔からドナウ河畔に及ぶ豐饒な土地にはスラブ系のプルース人やマヂャール人が這入つて來て中世の末獨逸人の東方植拓までは獨逸と緣のないものとなつて了ふ。之に反し西ゲルマンは常に獨逸の土地に定住して將來の獨逸人の本當の祖

先となつたものである。換言すれば古代獨逸の土地にゐたゲルマン人が中世のゲルマン系獨逸人となつたことになる。

この西ゲルマンは初めオーデル下流からマース河の間に定住してゐたものと考へられるが、紀元前一世紀の後半には北海東海の沿岸から中央山脈に到る間にまで擴がつてゐる。其の諸族の永い移動史は分明でないが、著名なキンバーやチュートンの移動はかなり後のもので東海沿岸から出發してオーデル河を遡りシレジアからモラビア、ボヘミアに出てアルプス山麓を經、紀元前一一四年から一〇二年の間ローマ邊境を脅かしたものと考へられる。明確な史實として殘つてゐるのは此の種ローマとの接觸の部面だけでローマの史實には既に紀元前二二二年にゲルマンとケルトとに對する勝利が傳へられてゐる。紀元前一世紀後半アリオヴィスト麾下のズエーベン人の南獨地方侵入の事はケーザルの報告に詳しい。

西ゲルマンはかかる膨脹の結果として紀元前後數世紀に亙つてケルトと混血したものと考へられる。ゲルマンとケルトとの類似は一つは共にインド・ゲルマンに發する所にもあるが、此の混血の所爲も與つて力あるといへよう。ゲルマンに關する古代文筆家の記述を見ても之をケルトと同じく長身、金髮、碧眼の特徴に求め、たゞゲルマンはケルトよりも更に之らの特徴が著しいとしてゐる。又寒さと餓とに強いが熱さと渴とに弱いとされてをり、勇氣、信義、人のよさなども語り傳へられてゐる。この人のよさは時に魯鈍と誤解された記錄もあるが、之は現在の北方獨逸人についても當嵌まることだと著者はいつてゐる。

人口史上一番興味のあるのは結婚生活に關する制度や慣習であるが、著者は古代ゲルマン人が一夫一婦制を堅持してゐたことを告げ夫と妻とを並置埋葬してゐる遺跡についても報告してゐる。俗間傳へる所の多妻說はキリスト敎の傳導者たちが布敎の效果を誇示する爲に揑造した妄說であるとして著者は輕く之を一蹴してゐる。古代ゲルマンの一夫一婦制と貞節とはタキツスも亦力說する所で「彼等の道德的慣習の凡ては寔に賞讃に足るものといふべく諸蠻族中たゞ彼らのみ一人の妻を以て滿足してゐる」といひ、また「彼女らは男をではなく寧ろ結婚そのものを愛した」とも傳へてゐる。從つて姦通に對する制裁も極めて嚴酷で、姦通せる妻は裸にされて皆に笞打たれ乍ら村中を引き廻されたといはれ、また姦通が發見された場合には妻の場合は勿論夫の場合でもその場で之を殺しても敢て罪に問はるゝことがなかつたといふ。童貞の賞讃されたことも當然でケーザルもゲルマン人の間では「二十歲以前に婦人と交涉する事を極度に罪惡視した」と傳へてをり、タキツスは彼らが結婚をいそがず「女たちも男と同じく長身强力で、この父母の力は子供たちに再現した」と傳へてゐる。一般に晩婚で、男は三十歲を過ぎるまで結婚せず、女は之より多少早かつたが地中海方面の人間と較べるとやはり格段に晩かつたと著者はいつてゐる。右の如くであるから生涯の伴侶としての婦人に對する尊敬は慣習上にも法律的權利の上からも極めて高かつた。この點中世の女性罪惡觀に未だ煩はされることのなかつた時代で、同樣にキリスト敎への改宗以前のゲルマン人たちには後に見る樣な結婚上の障害も亦殆んどなかつた。禁制は親子と兄弟姉妹の間だけで、繼母子間の結婚は差し支へなかつたといふ。產兒制限や子供殺しのなかつたこともタキツスの傳へる如くで、子を生むことを輕蔑する者は死を以つて罰せられたといふ。尤も氏族の長は弱い子を棄てる權利をもつてゐた。氏族（大家族）とは當時の國家の原細胞で親・子・孫三代に跨り一定

の土地所有と結びついてゐた血に基く權利の主體で、ナチスの所謂「血と土地」との最も古典的な先例でもあるわけだ。

古代ゲルマンの人口數については大約の推定以外に測り難いが、最も穩當なものとして Kossinna のものを擧げてみると、大體一方マイルに付二五〇人として獨逸の人口は約二百萬となり、全ゲルマン人の人口は三乃至四百萬と想像される。

南獨逸に於けるケルト諸族の種族的團結崩壞後はゲルマンは更にガリアや北イタリーまでも侵入したが、之は同時にローマ帝國がゲルマン人に對して三世紀に亙る防禦戰爭を行はねばならなかつた時代である。ローマはその最盛時にはラインやドナウの邊境に十萬の兵士や官吏を送つてゐたが、併し人口史的には殆んど問題とするに足りまい。史上に著名なトイトブルグの森に於けるヘルマンの勝利（西曆九年）はゲルマン人を遂にその政治的危機からも救つたが、併しローマ帝國の影響は獨逸人口史にとつて皆無ではない。多數のローマ植民都市や軍事都市が諸方に建設されたのも其の一つでケーザル沒後の建設になる現在のアウグスト、ケルンを最古のものとしてトリエル、シュパイエル、ボン、マインツ、シュトラスブルグ、レーゲンスブルグ、アウグスブルグ等の諸都市は皆その名殘りであるわけである。特にローマ帝國によつて强制的に諸方に移植されたゲルマン農民たちのラテン化はローマ市民權の供與によつて殊に速進され、彼らは市民權と同時にラテン語をも受けとり其の子孫は母國語を棄てて了ふようになつた。このゲルマン人のラテン化政策はモーゼル地方やロートリンゲン、スイスに特に好成績を擧げ、之に對しライン及びネッカー右岸の地方はそのローマの支配にも拘らずゲルマン及びゲルマン・ケルト的人口を持續したといふ。

三、初期中世は獨逸諸種族の形成された時代である

中部ヨーロッパをゲルマン化した古代ゲルマン人はこのイリリエン、ケルト及びローマ人に對する勝利の後漸く永い平和時代に入る。殊にローマ帝國の世界支配の破綻はこの平和時代に增殖せる獨逸人口に再び西方への途を開放することとなつたが、その爲めにも新領地を略取し確保し得る新しい國家的權力の發生を見るに到つた。初期中世代はかゝる新國家群と、之に伴ふ新種族との形成時代であるといへる。フランク、ヘッセン、アレマン、ババリヤ、チューリンゲン、ザクセン、フリーゼン等の諸種族の形成を見たのもこの時代である。中でもフランクは最も有力で五世紀にはメロヴィンガ王朝の成立を見、六世紀前半には全中部獨逸とババリアの一部をその支配下に置いてゐる。このフランクが獨逸民族史上にもつてゐる特別の役目は獨逸の西方に民族的國境線を、いひ換へれば八世紀以降今日まで大體そのまゝ持續してゐるといふ獨佛兩國語の境を樹立したことで、それはフランクがそのキリスト教化によつてラテン文化に讓歩せる限界であつたわけだ。斯く普通の意味の國境でなかつたからこそ今日まで大體に於いてそのまゝ持續してゐるわけで、獨佛兩國の起源と見られる例のヴェルダン條約（八四三年）も之に較べてはその民族史的意義は遙かに輕い。この言はゞ言語的國境を隔てゝ南東方に對峙してゐたのがアレマン人で、フランクの名が現在のフランスの起源となつたと同じくアレマンの名は現在の佛蘭西語に獨逸人に對する一般的名稱として轉化さるゝに到つてゐる。

中世に於ける獨逸人口史の中心は何といつても婚姻生活に及ぼしたキリ

スト教教會の影響にあらう。教會はすでに早く二世紀に獨逸の地に移植されてをり五世紀末以後には獨逸人の間にも改宗者の著增を見たといはれてゐるが、このキリスト教の四海同胞主義が婚姻に於ける身分階級的制限を撤廢させ、その病弱貧者への隣人愛の思想が民族的逆淘汰の現象を餘儀なくしたことは著者の特に力說するところである。又その反離婚主義の立場は人口の自然增加に有害であつたし、僧侶の獨身生活も布教の普及と共に民族的逆淘汰や出產の減退に影響するところ僅少ではなかつた。(十世紀末に僧侶數約一萬を算ふといふ。)身分階級的雜婚の好例はその人倫的頽廢既往に例を見ないといふフランク王室で、カール大帝の如きは一男を擧げた若年時の交涉を除いても相繼ぐ四人の正室と外に五人の側室とによつて七男十女を生んでゐるといふ。その妻女の凡ては貴族の出ではなく又同種族の者でもないが、一般にも混血現象はひろく全般に及んだと見てよく、一方に新しい王侯僧侶の新貴族層が生まれてくる反面には古代の非自由民や異民族たちは次第に完全な自由民と混血してきて獨逸人といふものは身分的にも法律的にも將又血統的にも其の姿を一變しはじめて來たとみてよい。之は十二世紀以降特に明瞭に現はれてくる事實であるといふ。

尤も右の樣なキリスト教の民族的惡影響の中にあつても結婚に關する古來の習俗は變らず傳承され民族の血統的健全さを保持することに役立つことと尠くなかつたと考へられる。結婚を神聖視し子孫を重んずることも同樣で、婚姻の財產法的效力は第一子の生まれて後にはじめて發生したといはれる。心身の缺陷は法律上結婚の障害とされてゐたし、又結婚に役立つ見込のない子供は早くから僧院へ入れられるのを普通とした。また子供がないといふことは姦通などと同樣に結婚解消の理由となつたといふ。婦人の地位は女をエバの娘、罪の根源と見たキリスト教の影響を受けて古代ほど重んぜられなかつたことは古代には男の倍であつた所謂 Wehrgeld (被害者の血族に與へられる殺人賠償金) が却つて半額となつた樣な點にも見られる。キリスト教の立場からは結婚は子孫維持の爲めの所謂ネセッサリー・イーヴルと考へられてゐたわけだが、子を產むことが妻の最重大事とされたことは種々の事例に見らるゝところで、或る處は子のない妻の Wehrgeld は三分の一にされたといひ、又二三の地方では子のない夫は媳むを得ざる場合は自分の代人を求めて妻に子を生ませ、その子を己が嫡子として之に一族の土地を繼がせたといふ。

が非合法的結婚の事實も全中世を通じて確證される所で諸侯の中には己が多數の子女を養育させる爲めに家臣の四分の一以上の者に結婚を禁じた者もあるといふ。また領主の婦人勞働場には姦通せる女や墮落せる少女たちが入つて來て爲めに一種の歡樂場と化したともいふ。尙十二世紀末以後にはフランスに初まつた騎士の所謂女人奉仕の風習が獨逸に入つて來て男女關係に尠からぬ影響を與へた。それは一方に愛慾を精神化した效果もあつたらうが、併し結婚の人倫的基礎は破壞されたと見ていゝ。

最後に初期中世代の人口については前代同樣賴むべき資料がないが、後期メロビンガ王朝頃の人口密度を一方マイルに付三〇〇人、十一世紀には五〇〇人といふ Kötzsche の推測に從ふと獨逸帝國の人口は(東方の新領地をも含めた約七十萬方粁に)ハインリヒ三世時代に五乃至六百萬となる勘定になり、バルバロッサ時代には七乃至八百萬と見てよいことになる。とはいへ之らの數字は勿論確かな根據のあるものではない。

四、高期中世代に獨逸の土地は本當に獨逸人のものとなつた

初期中世代は民族移動の曲折を經て獨逸諸種族の形成された時代であるが、今やこゝ數世紀間所謂高期中世代は其の内的集成の時代となるといつてよく、この時代に獨逸ははじめて本當に獨逸人の土地となり種々の種族や身分階級をわけ隔てゝゐた種々の特徴は爾來一轉して寧ろ獨逸民族の特徴として妥當するに到つたともいへる。といふのは高期中世代は專ら國内拓植と市場建設との時代で、人口は極めて正當な發展の跡を示し國内移動によつても外敵の侵入によつても停滯することなく、流行病さへ猶ほ後代に見る樣な破壞的な影響を及ぼすことがなかつた。この人口增加は農業中心の當時に過剩人口現象を結果したことは當然で、さればこそボヘミア、チューリンゲン、ハルツ等の森林山野にまで諸王や諸公の保護の下に强力な入植事業が行はれたのである。その點では大寺院も亦之に劣らぬ功績を殘してゐる。高期中世代の終り以後は十九世紀に到るまで獨逸本國の農村人口は少しも殖へてゐないといふ事實はこの時代の人口發展の逞しさを物語るに足るものである。多くの國内市場が建設されたこともこの人口增加の一結果で之は後代市民と農民との階級的分化に先驅したものといへよう。

政治史的には封建體制が完成される時代であるが、之を人口史的にいへば種族に代つて身分といふものが人口現象を左右する主役として登場してくることになる。結婚が同身分間に限定されるに到つたのは勿論で、それは單に當人だけでなく三、四世代をも遡つて問題とされたといふ。人口史上特に注目すべきは僧侶といふ特殊の身分階級の影響で、この血統といふものをもたない階級身分が他の身分階級の人口を數質共に侵害したことは決して僅少でない。それも初めの中は多くの子供の中での病弱者や無能力者を處理する一法として喜ばれさへしたが、十字軍や流行病で人口不足を告ぐるに到つては其の影響はいよ／＼甚しく、特に上層貴族の家柄で爲めに斷絶の憂むなきに到つたものも尠くないのは資料にも明瞭に觀取し得る所である。(例へばウェストファーレンで貴族の家柄は一二〇〇年に七十家を算へるが一三〇〇年には四十五、一四〇〇年には二十六、一五〇〇年には十四、一六〇〇年には八、一七〇〇年には六を算ふるに過ぎない。)そこで特に法王の許可を得て末子を現世にもどして結婚さすといふ如き便法も考へられたが、かのホーエンツォルレン家もかゝる便宜を缺いたならば既に舊く血統の斷絶を見た筈のものの一つだといふ。この種の工夫は一般の庶民の間でも同樣に種々の形で採用されざるを得なかつたといふのは僧侶階級の人口史上に於ける影響の如何に大きなものであつたかを想像するに足りよう。

この時代の人口を同じく前掲ケッチェの推定に見ると一方紆に付き十三四世紀に二〇乃至三〇人、十五世紀中頃に三〇乃至四〇人で、一四〇〇年頃の獨逸帝國人口は約一千五百萬を算ふるに到るわけになる。尤もこの人口增加時代には反面また人口喪失の厄難も尠くなく、度々のイタリア戰爭や、特に十字軍の影響は極めて大きい。遠征したのは皆壯年者であるし、男子のみならず婦女子も聖地遠征に加はつてゐる。また男子の多くは異境に止つて異境人を妻としたので多數の愛人たちは故國で未婚のまゝに取り殘されたともいふ。ともかくこの時代は獨逸民族にとつて空前の放血作用が行はれたわけだが、とはいへ異民族の血を混へることは殆んどなかつたことを著者はせめてもの代償として傍記してゐる。

最後に獨逸人口史上この高期中世代に特記すべき事柄として著者は獨逸民族意識の成立を擧げてゐる。特に歌手や畫家や彫刻家も明眸白皙金髮の北方人種系の理想像を禮讃し、獨逸の男はカール大帝の如く偉大で力强くなることを要求した。尤もその反面農夫や下僕たちが小軀で粗野で武張つた鼻と黑い眼とをもつた者として畫かれてゐるのは詩的對照の爲もあらうが、併し身分階級間の人種的差異の事實を物語るものであること、も亦否定し難いと著者は見てゐる。

五、晩期中世代は東方植民と都市建設の時代である

晩期中世代に獨逸民族は再びその生活領域を南と、特に東へ向つて擴大した。それは東方獨逸人口の創成と兼ねて都市建設の時代といへよう。古代の終りに退却せるエルベ以東の地は再び獨逸民族の土地となつたわけで、そこに獨逸民族を歐洲の大民族とした數百萬獨逸人を生長させた。同時に近代的意味に於ける都市建設はこの東方をハンゼの途によつて大西洋と結びつけた。

この東方開拓の先驅は商人とキリスト教布教師であり、纖いで深く掘る鐵の鋤を携へた農民の土着であつた。土地そのものが獨逸の國土となつたのは更にその後のことである。いひ換へれば彼らは侵略者としてゞはなく寧ろ文化的向上者として這入つて來たわけで、母國に於ける所謂落伍者ではなくエルベ河岸開拓の先驅者たちが自ら更に河を越えて東へ移つて來たわけである。そして其地のスラブ人口と同居し乍ら一段と高い文化の力によつて遂に之を吸收して了ひ、十六世紀までには特殊地方を除いてはスラブ語は全く影をひそめて了つたといふ。東方獨逸人口が今日でも異色のあるのはこの混血の爲めで人口史上にも極めて特異の混合現象であることを著者は强調力說してゐる。尙その後の一進一退の跡を見ても十五、六世紀にはボヘミア、ポーランド等スラブ系東方諸國の興隆あり故國の政治的支援を缺いだ獨逸勢力の後退を見るが、十八世紀中頃以來はフレデリック大王の東方經倫に再び勢を挽回、それが十九世紀末には又々ポーランド、チェック、マヂャール等の勢力を盛り返すを見、前世界大戰が獨逸の頽勢をいよいよ決定的なものとしたことは周知の如くであるが、現下の歐洲戰亂は再度また其の盛衰を逆轉したわけで、所謂獨逸の東方政策がその因緣の淺からざるものであるを思はしめる。

この時代に於ける都市の發生は『市民』卽ち法律的意味に於ける市民權所有者以外に廣く都市人口の問題として人口史上特記すべき事柄といへよう。こゝでは勞働者から手工業者へ、更に商人へ、或はその逆の、身分上の上下交流が行はれ停滯的な農村人口と好對照をなすわけだが、婚姻關係の上でも身分及職業的制約は農民に較べて比較的に薄い。少くともそういふ特徵を伴ふに到つた點に單に王侯僧侶やその臣下從僕たちから構成されてゐた前代に於ける都市の前身と區別されるのである。尤もこの時代の都市人口は嘗ては非常に過大視されたこともあるが、實際は極めて小さなもので當時の大都市でも人口二萬乃至三萬を超えない。最大なのはケルン市だがその人口は十六世紀中頃に約三萬一千の住人と六千百人の僧侶、學生及び外來者を算ふるに過ぎない。十五世紀に人口二萬以上を算へたものは右ケルンの外、ウルム、リュベック、ダンチヒ、ハンブルグ、ニュールンベルグ、シュトラスブルグの六市で、一七九二年に於ても猶ほ一萬以上の都市は全獨逸で六十、二萬以上のもの三十、最大のウィーンが人口二十萬

七千、ベルリンが十五萬、ハンブルグが十萬となつてをり、一八一九年に到つても人口五千以上の都市に住むものは總人口の一〇%に過ぎなかつたことを著者は注意してゐる。換言すれば人口問題上論議の焦點となる所謂大都市なるものは完全に現代的現象であるわけだ。

却説この時代の都市人口については種々の數字的資料が殘されてゐるが、いまその出生死亡の狀況を見ると各都市とも著しい死亡超過を示してゐる。一例を次のシュトラスブルグ市の數字に見ることができよう。

年次	出生	埋葬	差引き
一五六八——一六〇〇（年平均）	八一四	一四〇〇 (一)	五八六
一六〇一—— 三三	一〇〇四	一一五二 (一)	一四八
一六四一—— 七三	七八七	六六〇 (十)	一二七
一七二八—— 四九	一四七八	一六六一 (一)	一八三
一七五一—— 七〇	一五二五	一五六二 (一)	三七

特に當時の都市人口に就いて特記すべきは女子人口の甚しい過剩で、男一〇〇〇人に付フランクフルト・アム・マインでは女一一〇〇人（一三八五年）、ニュールンベルヒでは一二〇七人（一四四九年）、バーゼルでは一〇八〇人（一四五四年）となつてをり、最後のバーゼル市の數字を更に十四歳以上の人口に付て再算すると男千に付き女一二四六人といふ數字となる。大約男千人に付き女子人口の過剩は二百人と押へられるわけで、女子人口の過剩が指摘された十九世紀末でも一八七一年に女子の超過（男千人に對し）三七人、大戰後の一九一九年でさへ超過九三人（共に獨逸全國）であることを想起するなら略當時の有樣を髣髴するに足りよう。特に青壯年男子の都市來住の多かつたことを考へると此の現象はいよ〳〵注目すべきもので、著者はその原因を度々の戰爭、病氣、旅行中の生命の危險、職業上の不適應等のため男子の死亡率が異常に高かつた所にあらうとしてゐる。この女子人口の過剩に加へて、ツンフト制度その他當時の社會的事情による男の晩婚と更に僧侶の獨身生活とは晩期中世紀に終生獨身の婦人の著增を齎した。當時勞働婦人が極めて多かつたのもその爲であるが、尼僧院に入るものも亦尠くなかつた。特に上層身分の娘たちを收容する爲めに設けられた都市の尼僧院は高額の金錢的代償を求めたといふ。また他の女たちはなかば尼僧生活に似た病院勤務にその獨身生活の避難所を求めたといふ。かかる女子人口の過剩は男女を通じての就業難、隨つて又結婚難、それに信仰の動搖などと相伴つて道德の頽廢を齎したことは十字軍に多くの賣春婦が從軍した事實などにも明らかで、乞食の多かつたことも亦記錄に殘つてゐる。頽廢は遂には僧院にも及び宗教改革直前には特に甚しかつたことは周く人の知る所である。

都市の興隆と貨幣經濟の發達は亦獨逸の諸都市にユダヤ人を增加させた。といふのはキリスト教では利子をとるといふことを罪惡視してゐたので金貸しとしてのユダヤ人は實際的必要をもつてゐたわけで、特に諸侯はその財政的必要からも納稅者としてのユダヤ人を無條件的に排斥することを喜ばず時に保護をさへ加へたといふ事情もある。然し民衆の憎惡と反抗は絕えることがなくユダヤ人迫害は遠く十一世紀に初まり或は十字軍に際し或は黑死病の流行に當つてその責任者として事ある毎に慘殺され或は追放されたが併し彼らは其のすぐ又後に立ち現はれて來たといふ。略記するさへ煩しいその執拗な繰り返しは、要之、經濟的必要と民族的本能との相克の姿であるわけだ。たゞ十五世紀中頃から十六世紀中頃にかけてユダヤ人は遂に凡ての獨逸都市からひと先づ影を潛めざるを得ざるに到つた。この

迫害中多數のユダヤ人が改宗して獨逸人口に加はつたといふ通説は著者は之を根據なき俗説として否定してゐる。この間ユダヤ人とキリスト教徒との私通に嚴罰を與へ又キリスト教徒の少女や乳母がユダヤ人の家に働くことを禁じたなどといふ事例は諸方に見られるところで、同じ樣なことが現今ナチスの國民血統保護法の中に再び法令化されてゐるのも亦面白い。

獨逸人口史の中世代を了へるにはなほ中世代に特有な流行病の蔓延や度度の大飢饉の慘害についても語らねばならないが、興味は寧ろかゝる自然的障害を切り拔けて來た出産力の逞しさにあらう。といふのはこの人口消耗はいつも出産率の向上を以て補塡せられるを常としたもので、例へば一四五一年に二萬一千の人間を死なせたケルン市はその翌年には四千に及ぶ婚姻を以て之に答へてゐるのを見てもその一端を窺へると思ふ。たゞ流行病の蔓延に加勢した三十年戰役の影響は甚大で獨逸は之によつて其の總人口の三分の一から半分に及ぶ數を喪つたと推定されてゐる。

六、近代には國家的規模に於ける人民移植政策の登場をみる

三十年戰役による獨逸人口の損耗は勿論地方的に厚薄があるとはいへ、殊に都市人口に於てはその大部分は十九世紀に到るまで其の創痍を完全に回復し得なかつたもので、晩婚と生活上の不安とは出産制限となり、洗禮數の減少は戰役前に較べて都市に於ては或は四〇%から甚しきは七〇%にも及んでゐる。が出産減は村落にも同樣で自然的回復の望みのないこの間際は外國人の移入によつて多少でも之を補塡する外に途がなかつた。三十年戰役の影響は單に數だけの問題に止まらなかつたわけである。時恰も各國に宗教的抑壓の漸く甚しからんとした時代で移入民の給源にも事缺かなかつたともいへよう。信仰の爲に迫害の故國を去つたメンノー、ユグノー、ワルヅス宗徒等の名は既に我々の耳裡に親しい。國内移動も亦極めて激甚で處によつては屢〻土着人口よりも外來人口の方が多數であつたといふ。またフランケン地方では戰後に極端な適齡女子人口の過剩を見た爲め一六五〇年その地方議會は新舊兩派の如何を問はず僧侶の結婚を奬勵したといひ、又男は若し扶養能力さへあるならば二人の妻をもつことが許されたといふ。一地方的な事象ではあるが、以て當時の人口構成の異常さを髣髴するに足らう。

三十年戰役を筆頭に十七、八の兩世紀は獨逸の地を舞臺として度重なる戰爭が行はれたが、その結果外國人、特にフランス人の血は相當に獨逸の地へ流入したとみてよい。他方ブランデンブルグ・プロイセンの如きは戰禍の豫後對策として進んで當時の宗教迫害に故國を追はれた新教徒の移入を助成してをり、之に於ても特にユグノーの移入は著しい。ナント勅令廢止（一六八五年十月十八日）後旬日にして發せられたポツダムの勅令は之ら凡ての逃亡者を收容することを約してをり、移入を見たユグノー及ワルヅス宗徒の數はその後續者と子供を含めて約二十萬と推定されてゐる。彼らは五十九の植民地に收容されたが、特にベルリンでは市人口の六乃至七分の一を占めたといふ。之らは後に全く獨逸民族と混血して了つてをり、今は時にフランス流の名前にその痕跡を認め得る者があるといふ。尤もユグノーたちは高貴な情操と堅固な信仰の持ち主で、又多く特殊技能者でもあつたわけだが、十七世紀と共に一時完全に清掃されてゐたユダヤ人の入國も亦初まつた。經濟生活の國際化がその主因であるが諸侯もその財政上の理由から之を利用した點も尠くなく、宗教的對立意識の弱化せることも亦否定し難い。殊

に十八世紀に於ける唯理論的世界觀の影響も注目すべきで、レッシングの「ナータン」が出版されたのも一七七九年のことである。ユダヤ人にも國民として同權を與ふべしとした一七九一年パリ國民議會の影響も亦想像するに難くない。とはいへ未だ十九世紀後半に見る樣な國法上の同權を與へられたわけではなく王侯のユダヤ人保護にも一進一退の跡を示してゐる。

當時は周知の如く各國共人口增加、所謂 Peuplierung の方策に腐心した所謂重商主義の時代であるが、著者によると當時の政治家や人口政策家たちは人口はギリシヤ・ローマの時代、或は舊約聖書の時代に較べて遙かに減少してゐるとの觀念に皆一樣に支配せられてゐたといふ。この國家的規模に於て實施された人口增加策、とりわけ移入民助成策の最も標本的なるものは十八世紀に於けるプロシヤ王國で、特にタタールの侵寇とペストの流行に人口の著減を見た東プロシヤ地方の Repeuplierung は一七一〇年以降歷代政府により凡ゆる手段を盡して强行されてゐる。フレデリック大王の治政中の移入民だけでも總計約三十萬人、外に軍隊中には時に八萬人の外國人がゐたといふ。プロシアの人口密度が一方マイルに付一七〇〇年の九一九人から一八〇〇年に一五八四人へと十八世紀中に二倍近くの著增を見せてゐるのは此の所謂人民移植政策の效果を確かに數字の上で確證するものであるが、併し著者は質の上から之を見れば必ずしも論議の餘地なしとせずとしてゐるようである。

七、十九世紀と共に民族的變質の危機は始まる

一八三〇年乃至四〇年の十年を以て我々は獨逸人口史上新時代を劃する轉換期に當面する。ナポレオン戰爭は獨逸の領域に大變動を結果したばかりでなく、諸國に移入された自由思想は近代機械工場の發達と相俟つて人民を土地への緊縛から解放した。之らの政治的、經濟的及び社會的生活條件の激變が人口の構成分化にも一大變動を惹起したのは勿論で、人口は驚異的なる膨脹を開始し出したし、都鄙別分布の割合は逆となり、傳承の身分階級及び種族的階層關係は全く破壞されて了ふ。莫大な人口は海外移民として故國を去る一方、ポーランド系ユダヤ人の如き異民族は盛んに獨逸の地へ流入して來る。人間平等の自由主義的原則は混血現象を速進する一方、嘗てはその增殖を抑へられてゐた肉體的、精神的並に道德的低格者が著增してくる。著者によればこの今から百年前の轉機以來獨逸民族はその民族的變質の危機に暴露されてきたわけで、十九世紀の人口史の教ふる所は一としてナチス人口政策の必然性を物語らざるはないことになる。

いま十九世紀に於ける獨逸の出生及死亡率變動の大勢を見ると次の如くで、

	出生率 全國	出生率 プロシヤ	死亡率(全國)
一八四一——	五〇	三六・一	三九・三	二六・八
一八五一——	六〇	三五・三	三九・三	二六・四
一八六一——	七〇	三七・二	四〇・二	二六・九
一八七一——	八〇	三九・一	四一・三	二八・二—二六・一
一八八一——	九〇	三六・八	三九・七	二五・八—二四・四
一八九一——一九〇〇		三六・一	三八・九	二三・三—二一・二
一九〇一——	一〇	三四・三—三二・三	三一・五	一九・九—一七・二

(備考) 表所載年次以前のプロシヤの出生率については一八一六—二〇年に四三・九、一八二一—三〇年に四〇・七、一八三一—四〇年に三九・二である。又プロシヤの死亡率は全國のそれと大同小異である。

出生率は解放戰爭後（一八一六—二〇年）の四三・九の高率から漸減歩調を示し、普佛戰爭後（一八七〇—七一年）の一時的上昇の後も亦次第に低下の跡を示してゐる。換言すればこの世紀に於ける人口著增は寧ろ死亡率の低下に求むべきで、更に一八一四年以降極端な消耗戰爭を見なかつたこともその一つに數へ得よう。尤も前世界大戰による獨逸人口の消耗（戰死百八十萬、統後の病餓死七十五萬、大戰中の出產停止三百五十萬）は論外だが、併しその民族的危機の本體は今世紀以降、特に世界大戰後に見る出生率の急低下にあるわけで、著者はブルグドェルファーの獨逸國民老體化の忠告を想起し乍ら人口學者の眼には一九二六年以降その出生率（ブルグドエルファーの所謂「真の出生率」）は最早現人口を維持するにも不充分となるに到つたことを告げてゐる。

が十九世紀の獨逸人口史がもつ暗影は單に出產減退といふ數の問題だけではない。所謂婦人解放運動は女といふものをその家庭的義務から疎外して了ひ、女といふものをその民族的、氏族的或は身分階級的特性に基いて評價した舊來の價値標識は全く時代おくれのものとなつて了つた。何處へいつても結構板に附いて生きては行けるが併し何處にも本當の落ち着き場所といふもののない女、數ケ國語で會話をする唯單に「女」であるといふだけの女、それが新時代の生んだ女の姿だと著者はいふ。がこの種の自由と解放とは單に女だけの問題ではない。身分階級的特性の解消は廣く國家的助成の下に强行されたわけで、貴族はその血統保持の意力を喪失して了つたし、大量の工場勞働人口の離村は同時に道德的にも彼等をその人倫的基礎から引き離して了ふ結果となつた。獨逸の產業別人口變遷の跡は次の如くで、

	プロシヤ 一八四三年	全國 一八八二年	一八九五年	一九〇七年	一九二六年
農業及林業	六一	四〇	三三	二七	二三
工業、手工業、鑛業	二三	三五	三八	四二	四一
商業及交通業	二	九	一一	一三	一六
官公吏、軍隊、敎會、自由業	五	四・三	四・七	四・六	五・一
家事手傳人		五・七	四・五	三・五	三・一
無業（利子生活者）		四・七	六・二	八・一	九・一

（備考）本表は職業者とその家族を含む人口の百分比なり。

今や獨逸總人口の三分の一は大都市の市民となつてゐる（一九三三年に人口十萬以上の都市人口は三〇・一%）。十九世紀の初めには都市住民の六〇%は市中に自分の土地といふものを有つてゐたが、百年後にはその樣な市民は僅かに九%を算ふるに過ぎない。この所謂「大衆」の魔力は地方から流入する優秀人口をすぐと同化して了ひ、とりわけその出產能力と出產意慾とを不具にして了ふ。大都市の市民が民族的紐帶を喪ひ勝ちなのも當然で、淺薄な國際主義的思考法の擬となつたのも今に記憶に新なる所である。

ユダヤ化の禍も十九世紀に特に甚しい。ウェストファーレン王國で一八〇八年に凡ての臣民に法律的平等と信仰の自由を認めユダヤ人の同權をも認容して以來、ユダヤ人は各地方とも著しく增加し又自ら進んで獨逸化しようと努力した。特に六〇年代以降バーデンを筆頭に各邦政府ともユダヤ人年來の希望を滿足せしむるに到つて獨逸民族の家族的、職業的、經濟的並に政治的生活はその門戶を彼等に解放して了ひ、一千年の間堅持されて來たユダヤ人に對する國民的感覺は遂に最惡の狀態にまで退化したと著者は

いふ。

が著者によれば右の如き獨逸民族の民族的變質過程を更に深刻化したものは前世界大戰後のインフレーションと十一月共和政府の成立で、嘗ての身分階級的殘滓はこゝに根こそぎ一掃されて了つた。この百年の發展過程に最後の終止符を打ち新しい再出發を初めるところに著者によればナチス登場の眞意義はあるわけで、それは凡ての職業を國家的監督の下に置き、勞働する者の凡てを其の智能的勞働たると筋肉的勞働たるとを問はず一樣に「勞働者」として之を國家の勞働者に再編成することでなければならない。それは身分や階級の對立を止揚することによつて個々の勞働者を其の素質と能力との差異に相應せる新しい身分階級に、國防、生産、及び教化の諸階級に統合するといふ新しい課題の發生を意味する。この再組織の成否如何がナチス人口政策の今後に俟つものであるはいふ迄もないが、本「獨逸人口史」一卷の意圖する所は唯この事の必然性を闡明するところにあるともいへよう。「歴史によつてのみ民衆は自己自身を自覺する」といふショーペンハウエルの言葉を借りて著者もその最後を結んでゐる。（本多龍雄）

中世晩期及近代初頭獨逸都市の出生及死亡

○ブレスラウ市（年平均）	（出生）	（埋葬）	（差引）
一五五二—六二	一、三一三人	一、三七三人	（一）六〇人
一五六三—七二	一、二一八	一、六七八	（一）四六〇
一五七三—八二	一、二八五	一、〇二九	（十）二五六
一五八三—九二	一、二〇六	一、八一二	（一）六〇六
一五九三—一六〇二	一、一一一	一、五六八	（一）四五七
一六〇三—一二	一、一一六	一、〇六六	（十）五〇
一六一三—二二	一、一一七	一、四九六	（一）三七九
一五五二—一六二二	**一、一九五**	**一、四三二**	（一）**二三七**
一六五五—七四	八八九	一、〇二一	（一）一三二
一七〇五—二四	一、一九九	一、四二七	（一）二二八
一七四五—七四	一、二八八	一、五八四	（一）二九六

○ブレーメン市（通計）	（出生）	（埋葬）	（差引）
一七〇〇—〇九	九、六四二人	八、八七九人	（十）七六三人
一七一〇—一九	九、〇五八	九、八一七	（一）七五九
一七二〇—二九	九、四〇七	一〇、七四一	（一）一、三三四
一七三〇—三九	一〇、八〇六	一一、〇三九	（一）二二三
一七四〇—四九	九、九七四	一一、一一八	（一）一一、四四
一七五〇—五九	八、七六三	一〇、九七三	（一）二二、一〇
一七〇〇—九九			（一）**八、三六四**
○バーゼル市	（出生率）	（死亡率）	
一六〇一—七〇	三一・〇	三三・六	
一六七一—一七四〇	二五・六	二一・九	
一七四一—一八〇〇	二一・七	二四・三	
一八〇一—六〇	二三・三	二二・三	
一八六一—一九〇〇	三〇・二	一九・六	

カイザー著「獨逸人口史」より